

# 東大寺尊勝院弁曉と唱導史料

鈴木舞子

〔要旨〕近年、神奈川県称名寺より発見され注目を集めている史料がある。「称名寺聖教 弁曉説草」である（以下「弁曉草」と略す。「称名寺聖教弁曉説草」に限らず弁曉の説草全般を指す際は弁曉草と記す。「説草」とは僧侶が法会（仏行事）の中で読み上げる「表白」などの「唱導」の草稿を指す。また、「弁曉」とは平安後期から鎌倉前期にかけて東大寺で活躍し、東大寺尊勝院院主や東大寺別当を務めた東大寺僧弁曉（一一三九―一二〇二）である。従来の「弁曉草」の研究は、日本文学研究の中で用いられてきており、仏典との関連や弁曉の表現方法に主軸が置かれてきた。そこで本稿では、まず維摩会や新熊野御八講での弁曉による表白の比較を通して、維摩会のような僧階昇進の条件となる法会と世俗権力者が施主・願主となる法会では表白の表現や構成に違いがあることを確認した。

次に「弁曉草」を歴史史料として用いながら、後白河院を始めとする世俗権力者とのつながりを解明した。その結果、六条天皇追善法会で用いられたとされた説草が、後白河院による建春門院追善の法会で用いられた可能性を提示した。その他にも、八条院や近衛基通との関わりや平頼盛追善法会への出仕等、弁曉自身の活動も浮き彫りとなった。弁曉は、後白河院を中心とした世俗権力に唱導僧として関わる中で、南都復興への協力を集め、寄与していったと言える。

本論の考察により明らかとなったのは、治承の乱、南都焼討といった公家・寺家双方の危機的状況の中で数々の法会が修されたこと、東大寺復興を契機

とした人的関係の構築、そのような中で作成されたのが「弁曉草」であったということである。

「キーワード」 弁曉・後白河院・建春門院・東大寺・唱導

## はじめに

近年、寺院社会や法会に関する聖教史料の研究が進んでおり、唱導史料もそのひとつとして注目されている。「唱導」とは、『日本国語大辞典』において「教えを説いて、人を導くこと。説教・法談などを行なうこと」と記されている。中国・梁の慧皎が六世紀に著した高僧の伝記である『高僧伝』において、

唱導者、蓋以宣唱法理、開導衆心也、<sup>①</sup>

とあり、「唱導」とは仏法の「法理」を唱えて人々を教化することであることが説かれている。研究史上では「唱導」という言葉の示す範囲について様々な意見があるが、小峯和明氏は「法会で遂行される言説」を唱導と定義しており、現在ではこれが定説として用いられている<sup>(4)</sup>。また、箕輪顕量氏は「唱導」を、

① 表白（法会を莊嚴する言説、法会の意味を知らしめる。出家の人々が作る）

② 経釈（經典の解釈）

③ 願文（主に法会の主催者である公家、貴族が作成）

という三つに分類した<sup>(5)</sup>。これらを踏まえて本稿では、法会において読み上げられる詞の総称を「唱導」と定義したい。

ところで従来の唱導研究の多くは天台宗僧の澄憲・聖覚親子が大成した「安居院流唱導」にかかわるものであり、南都における唱導活動への研究は十分とは言えない。

そのような中で近年、神奈川県称名寺より発見され注目を集めている史料がある。「称名寺聖教 弁曉説草」である<sup>(6)</sup>（以下「弁曉草」と略す。「称名寺聖教弁曉説草」に限らず弁曉の説草全般を指す際は弁曉草と記す）。「説草」とは僧侶が法会（仏事行事）の中で読み上げる「唱導」の草稿を指す。また、「弁曉」とは東大寺僧弁曉（一一三九―一二〇二）である。弁曉は、平安後期から鎌倉前期にかけて東大寺で活躍し、東大寺尊勝院院主や東大寺別当を務めた。平氏による南都焼討の際には、勸進聖重源上人と協力し東大寺復興に尽力した人物である。一方で学僧や能説家としても名を馳せ、『三国仏法伝通縁起』中では「中古之英匠」、『玉葉』では「當時之能説」と称された。しかしながら、これまで弁曉が残したとされる唱導史料としては、東大寺図書館に自筆の説草として

伝わる『八幡大菩薩并心経感應抄』や、大須真福寺で発見された弁曉草の断簡、弁曉の後に東大寺別当となった宗性が書写した聖教史料の中に数点知られる程度であった。そのような中で、新たに発見された称名寺聖教「弁曉草」は、唱導の名手として名を遺した弁曉の活動を示し、かつ南都における唱導活動の一例として貴重な唱導史料であるといえる。

弁曉に関する先行研究としては、弁曉の出自や業績、東大寺復興に際しての重源との協力関係を明らかにした追塩千尋氏の研究があるが、追塩氏は「唱導僧としての弁曉」の解明には未だ課題が残されていると述べている。また「弁曉草」に関連する研究としては、「弁曉草」翻刻と外題刊行に際した西岡芳文氏<sup>(9)</sup>、小峯和明氏の研究<sup>(10)</sup>、後白河院や東大寺衆徒伊勢参宮との関連を明らかにした渡辺匡一氏<sup>(11)</sup>、伊藤聡氏<sup>(12)</sup>、高橋悠介氏<sup>(13)</sup>、猪瀬千尋氏などの研究が挙げられる。これまでの主な「弁曉草」の研究は、日本文学研究の中で仏典との関連や弁曉の表現方法に主軸が置かれてきたといえる。

そこで本稿では、第一章で法会および役割の異なる場で、どのように弁曉が唱導を用いてきたのかを明らかにしていく。第二章・第三章では、「弁曉草」を通して、歴史の中での世俗権力者とのつながりの解明を試みる。つまり本稿では、唱導僧としての弁曉の姿や活動を、歴史の中に位置づけ、弁曉草の読解を通して明らかにしていきたい。

なお、本稿で用いる弁曉草の史料名は『称名寺聖教尊勝院弁曉説草 翻刻と解題』による。

## 第一章 唱導の機能―使用された場に基づいての考察―

本章では、唱導が実際にどのように法会の中で用られたのか、また催

される法会によって唱導の内容にいかなる違いがあったのかを、開会の際に読み上げられる「表白」を通して考察する。また法会の中で役割や、法会により述べられる唱導の内容の違いがあったのかを考察していきたい。

そもそも法会は僧侶にとって日々の修学研鑽の成果を示す場であった。その様子は、物語文学で描かれる法会の記述からも知ることができ。例えば、山本真吾氏は唱導に関する物語文学での記述として『延慶本平家物語』第一本三一「後二条関白殿滅給事」には、膝も震え、前後不覚のようにみえた導師が、いちど唱導を唱え始めると、聴衆は感動し涙を流したという一面面を挙げている。<sup>(15)</sup>

『民経記』貞永元年（一二三二）三月十九日条には、藤原経光が父頼資の発願で造られた阿弥陀如来像の供養を行った際の記録がある。

已始法印<sup>(聖覚)</sup>入来、中納言殿令対面給、次始供養儀、講演之趣、感涙浸袖者也、

講師である安居院聖覚の講演の趣旨に聴衆が感動し涙を流すという記述がなされている。これらの記述から、法会の中で唱導が施主や聴衆の関心を引く所作であったことがうかがえる。

では、そのような唱導を僧侶はどのように作成し、用いていたのかを弁曉の表白を用いて解明していきたい。

## 第一節 法会での役割による唱導の違い

本節では法会内での役割による唱導の違いを検討していく素材は、弁曉が表白を残している興福寺維摩会での表白である。

まず前提として、維摩会の概要を高山有紀氏の先行研究をもとに押さえておきたい。<sup>(16)</sup> 維摩会とは藤原鎌足が維摩経の読経により病気が平癒したことから聖朝安泰と国家安泰を祈願して始まり、仏法興隆と学僧教育の奨励を企図した法会である。維摩会への出仕は僧階昇進の条件とされ、「南都三会」の一つに数えられた。

維摩会で披露される表白には講問論議における「講師表白」「問者表白」と堅義論議における「堅義表白」「精義表白」の四種類がある。講師と問者の間で行われる講問論議では、一人の問者の出題に講師が即答するという形式で行われ、講師は聴衆に向けて日々の研鑽の成果を示す。講師には、得業であり維摩会の聴衆を経験している条件に加えて、僧綱や興福寺別当の推挙を受ける学侶が選ばれた。一方堅義論議では、探題により出題された論題に対して堅者が自説を主張し、五人の問者からの質問に応答し、その結果を精義が判定するという流れで行われる。精義は即時に問答の内容を理解した上で、堅者に判定を下さねばならず、学識が求められる役割である。

次に、各々の役職についた僧侶が読み上げる表白について、内容の相違を検討していきたい。検討材料とするのは『維摩会表白』の「講師表白」と弁曉が抄した『維摩会表白抄 初度』の「問者表白」と「精義表白」である。

まず、「講師表白」についてであるが、これも高山氏の研究を基に、要点を整理したい。「講師表白」は、『維摩会表白』として残されており講師に任じられた僧侶のみが閲覧と書写を許され、歴代の講師は同じ表白を用いた。

①「維摩会縁起」：維摩会の縁起や功德、維摩会を開会する意義を述べる。

②「願文」…自身の苦学の様子や学功を謙遜する前半と、天皇の世の安泰や三宝の護持や戒律による天下の静謐について述べる後半に別けられる。

③「勧請」…諸仏菩薩の来臨を要請し、諸神の来迎や施主御願の満願などを祈願する。

④「廻向文」…仏事法要などの功德を、衆生や死者の為に回向する目的で唱えられる文言。

⑤「経尺文」…維摩経を一品ずつ経尺するもの。

内容は維摩会の由緒や次第、願文で構成されており、代々同じ表白を書写し使用するため、講師は一から表白を作る必要がない。<sup>(18)</sup>

これに対して問者表白、精義表白は、講師表白のように代々伝授されるものではなく、任じられた僧侶はその都度自ら表白を作成する必要がある、それ故任じられた僧侶には表白の独自性と高い学識が求められた。

さて『維摩会表白抄 初度』は、寿永二年（一一八二）・元暦元年（一一八四）・文治二年（一一八六）の維摩会で弁曉が問者と精義を勤めた際に使用された表白であり、東大寺僧宗性によって書写され、残されている。<sup>(19)</sup> 其中で、弁曉が寿永二年の維摩会において講師範雅について述べた問者表白を確認したい。

#### 寿永二年維摩会初座講問 講師範雅

毘那城之月及光耀於飛鳥朝、菴羅園之花留芬芳於耶馬台、以降、玄談探顯、不二門之樞擡高、開白法煽世、淨名宝之道義云、移龍才之期鱗飛、以之擬河津之浪、名之待鳳拳、由之凌寥廓之雲、誠是弘道之濫觴、伝燈之軌轍者、講匠早遁杲葉榮華之後、頗久嗜八識五重之学窓、智力拔山、雖為駱前之才妙弁懸阿量耶八中之宝哉、弁曉芸□

三余、学業猶拙、花嚴一宗勅暖獨及、慙当初問之仁、愁揭二明之題、

意味が取り難い部分もあるが、大きく分けて、①維摩会の縁起を語る内容、②自らの学を謙遜する内容、といった構成となっている。

表白の前半では仏法がインドから日本に伝わった事を毘那城の月光や菴羅園の花に例えて表現し、「不二門之樞擡高」との一文では維摩会で用いられる經典である「維摩経」で論じられる「不二法門」について触れつつ、維摩会が「弘道之濫觴」であると、維摩会の重要性や由縁を語っている。

表白の後半では、講師である範雅について「頗久嗜八識五重之学窓、智力拔」と記して抜きん出た知力を持つ人物であると評し、その学識を称えている。一方で、自らの学識が華嚴教学のみに偏っており稚拙であると謙遜している。

また、精義表白もほぼ構成は問者表白と同じであるが、次のような表白が残されている。

本用之 弁曉仕朝廷而三十ヶ年、雖歎列次於龍象之筵、廢夜暫而幾多日、独恥痴鈍於□羊之質、每応喚恐踏深淵之水、每出詞心迷理屈之霧、弥選大会精義之仁、頻覽短才顧身之恨、

本説草は弁曉が精義としての維摩会出仕に備えて作成したものであるが、「未用之」から実際には用いられなかったものであると推測される。精義に選ばれたものの、自らの才能の無さを恨めしく思うといった表現や、「毎出詞心迷理屈之霧」という文言からは、表白を作り出すことを苦心している様子が語られる。



このように維摩会の表白は、概観すると「維摩会の縁起を述べる内容」「自分の学識を謙遜する内容」を含むものであり、講師、問者、精義のものと同通っている。しかしながら、細かな内容は問者、精義では自分の学を謙遜する内容、そして相手を称賛する内容と論議を始めるにあたる「挨拶」のような内容とが相違している。また、前提として講師表白は代々同じ表白を使用するのに対して、問者、精義は出仕する度に独自性や美辞麗句に富んだ文面を作成することが求められたという違いがある。

## 第二節 法会の性質による唱導の違い

本節では、法会によつて唱導に異なる違いがあったのかを考察する。検討材料とするのは、法華会での表白である。

法華会とは、法華経を講説する法会であり、すでに佐藤道子氏や滝口恭子氏による研究がある。それによれば法華会には様々な種類があるが、法華経八巻を一日二座ずつ四日間に分けて行う「八講」が最も多く、八講に無量義経と観普賢経を加えて十座にする「法華十講」<sup>②</sup>、十講を千日間繰り返す「千日講」<sup>③</sup>等があることが知られている。

そこで今回は「弁曉草」の「新熊野御八講 建久二年十一月八日始之」(「称」三三六函二〇号)を取り上げたい。新熊野社は、永暦元年(一一六〇)十月十六日に、初めての熊野参詣を目前にした後白河院により熊野権現を勧請し創設された神社である<sup>④</sup>。熊野詣については白河院から後鳥羽院までの約百年間の院政期において隆盛をみせたことで知られているが、その中でも後白河院はもっとも多い三十三回もの参詣を行った<sup>⑤</sup>。記録上確認できる後白河院の新熊野社への参詣は、仁安二年(一一六七)五月三日が初めてであり(「兵範記」仁安二年五月三日条)<sup>⑥</sup>、最後に行われたの

が本節で取り上げる建久二年(一一九二)と、二十四年の間に参詣回数は二十七回にのぼる。

本説草は、建久二年十一月八日に修せられた新熊野御八講におけるものであり、後白河院が施主となっている。同時代の公卿日野資実の日記である「都玉記」によれば、八日から始まった御八講に弁曉が出仕し、講師と問者を勤めていることが確認できる。その構成は、

- ① 熊野権現や阿弥陀如来、薬師如来等の神仏を讃える表白
- ② 後白河院による仏教の興隆を讃える表白

に区分でき、特に後半に展開される②の後白河院についての記述が特徴的である。

我君之促臨幸御十善一心之煙匂芳ク、郡卿之列斎庭低頭、合掌之藥各統、倩見会式之嚴重、実知盛応之捧所生惠業奉莊権現之法楽、定知無来無去之本地、底ニハ実智之水弥清ク、大慈大悲之社檀、下ニハ権化之雲□、都神モ悦ヒ、人モ悦ヒ、世モ穩、国モ穩、殊ニハ我君玉体安穩、宝寿長遠、御臨終正念、往生極楽自行化他、無辺御願一々速円満、獲得功德、猶広善根、無ヲハ限豫参月卿雲客皆来掃災招福之慶、群集之所素、貴賤悉満現当二世之悉地事、為恒例不具権現、宜知見、

これによれば、後白河院による十善を尽くした熱心な法会への出仕や、それによる公卿らの参列の様子、院の善行による功德が国や人々に広がり、災いを払い、福を招く様子が描かれる。また、施主である「我君」後白河院を讃えるとともに、その玉体安穩や長寿、臨終の際に極楽に往生すること等が述べられている。

第一節で取り上げた維摩会表白と本表白とを比較すると、表白の内容が大きく異なることがわかる。確かな学識を基盤に美辞麗句を用いる維摩会に対して、より分かりやすく施主である後白河院に対する敬意や院の業績を語る新熊野御八講という差異が浮かび上がる。そもそも両者とも「公請」の法会であるが、性質に違いがある。元来、維摩会も藤原氏の先祖追善として始まった法会であつたが、九世紀ごろに「南都三會」に組み込まれ、僧階昇進の階梯としての性質を強く持つこととなった。<sup>(27)</sup>一方、後白河院の「公請」である新熊野御八講は、院個人の強い熊野信仰の下に行われた法会であり、僧階昇進といった役割は持っていない。よって、唱導とは法会の性質、施主・願主により内容や表現方法に大きな差が出るということがいえるであろう。

以上の通り本章では唱導がいかなるものを、唱導に関する文学・日記中の内容や、実際に用いられた表白を通して確認した。

唱導は法会において、法会を莊嚴する役割を持ち、聴衆と読み上げる僧侶双方から重視された。また、維摩会や新熊野御八講での表白の比較を通して、維摩会のような僧階昇進の条件となる法会と世俗権力者が施主・願主となる法会では表白の表現や構成に違いがあることが明らかにになった。

本章の冒頭で挙げたように、法会や唱導は世俗の注目を集める対象だったといえるが、その法会のもつ性質により唱導のあり方は異なる。

維摩会の表白は勧請された神仏を讃えたり出仕する僧侶の学識を誇示するために取って難解な文言を用いているようにも思える。一方で、新熊野御八講のような世俗の人物が施主として開いた法会では世俗の人々の感動を誘うべく平易な表現を選んだのではないかと考えられる。特に、施主の功績や追善対象の聖霊について周囲に知らしめる必要があり、施

主や聖霊に対する深い理解が求められたものであろう。

つまり唱導とは、法会や施主に応じて表現を柔軟に変更し、かつ学識や高い表現能力が求められる所作であつた。

## 第二章 唱導師としての弁曉

### ―「弁曉草」の分析を通して―

本章では、唱導師としての弁曉の活動を、「弁曉草」の解説を通して明らかにしていきたい。

そこでまずは、「弁曉草」の概略を西岡芳文氏「弁曉および弁曉草について」<sup>(28)</sup>をもとに確認する。本研究は『称名寺聖教尊勝院弁曉説草翻刻と解題』<sup>(29)</sup>の中に収録された解題である。「弁曉草」は称名寺二代長老劔阿（一二六一―一三三八）が主導し書写させたものであり、また、称名寺三代長老湛睿（一二七一―一三四六）の説草中に「弁曉草」が含まれていることを指摘している。

「弁曉草」の形状は縦一三・六糎×横十三・九糎の粘葉装（枳形本）である。表紙の右端に「弁―尊勝院八十三之内」「弁―尊勝院七十内」と記される四九点が現存する。外題・標目は称名寺二代長老劔阿の筆と推定される。本文を書写した人物は特定されておらず、劔阿が東大寺に出入りできる人物に書写を依頼したものとされている。外題は原則として中央に記され、左端上部の墨書は簡便な分類の目安として書き付けられたものと考えられている。<sup>(30)</sup>「弁曉草」は弁曉の説草を劔阿の指揮の下に書写された史料であり、書写の元となった弁曉直筆の弁曉草が如何なる形態であつたのか、測り知ることは不可能である。

次に、その内容について、弁曉と同時代に唱導の名手として活躍した

安居院澄憲・聖覺の安居院流唱導と比較しながら述べてみたい。『転法輪抄』は、「実際に使用された表白や願文の実地例をなるべく多数集める方法」、『言泉集』は「表白や願文に用いる類句を、冒頭の句、三宝を勧請讃仏する句、布施供養の句などに分類し、それぞれに幾例か、もしくはなるべく多数の名句を、また公式句などを示しておく方法<sup>①</sup>」として作成されており、「後白河院」「神祇」等の分類がなされ、明確に唱導を整理して作成された唱導集であることがわかる。

一方で、「弁曉草」は後白河院や八条院など公家主催の法会以外は、主催者も記されておらず、使用された年月日が外題に明記されているのは二例だけである。しかしながら、「弁曉草」の中には、本文の解説や他史料との比較検討を通じて、施主や聖霊（供養対象）、使用された時期の比定が出来るものがある。そこで本章では、このうちの二例を通して、唱導師としての弁曉活動を明らかにしていきたい。

## 第一節 「千日講結願 為夫」の検討

「千日講結願 為夫」（以下、本節では本説草と省略する。『称』三三六函二一号）は小峯和明氏によって、後白河院の孫の六条院没後の母后藤原育子による追善の「説法詞」の可能性が示唆されているが、その根拠とされているのが史料中に見られる「安元二年」という文言である。一方、猪瀬千尋氏は安居院流唱導の『転法輪抄』中の「安元二年天王寺御逆修趣旨」との関連を指摘し、後白河院の女御であり安元二年に崩御した建春門院平滋子追善の千日講結願時の説草の可能性を指摘している。<sup>②</sup>猪瀬氏は、根拠として本説草中の「タトヒ身ハ隠レルトイヘドモ、魂ハ去リヌトイヘドモ、コレヲ継ギテ、猶菩提ノ勝因ヲ祈ル」という一文から、建春門院の意思を後白河院が継いで千日講を行ったと提示して

いる。筆者も、本説草が建春門院追善法会での説草であるという説について賛同しており、猪瀬氏が挙げた根拠に加えて、新たに説草の読解を通して論証していきたい。

本説草では、聖霊の御願の千日講を「我君」が継承して実施したことや聖霊との別離を「我君」を始め人々の悲しむ様子が表現されている。ここで、建春門院追善の千日講の根拠となる部分を確認したい。

悲来リシ之後、日々無尽之我君之涙、送四ヶ年而弥深、念々難忍之悲、経□千劫、ナクサメカタク被思食故、営勤行御、我君御訪御功德、付願付蜜<sup>③</sup>、実量辺□□□□、始自中陰四十九日□□□訪、至于此千日結願之今日、而無空日、時而無点時、或四天王寺□□□日御逆修、或昔又無一百ヶ日ノ御八講、

欠損が多く、意味がとり難い部分も多くあるが、「我君」が悲しみ、涙に暮れる日々を送る様子や、四天王寺での「御逆修」や「百ヶ日ノ御八講」について触れられている。聖霊の四十九日以降に始められた千日講がこの日に結願すると解釈することが出来る。続きには、この千日講がどのように行われてきたのかが記されている。

今御講演者、殊出御在生御意、君御講苦令無退転劇始御事候へハ、  
安元二年□月八日以後□独□取行□程日々連綿講会之至□

この千日講は聖霊の意向であったこと、「君」が中止することなく安元二年以降は一人で取り行った、と解釈できる。「安元二年□月八日」は欠損のため正確な日付は確認できないが、「安元二年七月八日」と仮

定すると、後白河院の女御建春門院平滋子の没年月日と合致する。

さらに、本説草の末尾にあたるこの引用部分には、

我后八百二十年之後、必早々預弥陀觀音之來迎御テ、先ハ語安元以後ノ娑婆旧事ヲ、九品蓮台ニ並肩、一仏浄土ニ同セン契、即生々世々列見仏聞法之善友、在々所々奉成三賢十聖之伴侶、返々モ交ムコト詞同ク娑婆之昔ニ、奉事謁姿、如在世之古ヘノ、トコソ候メレ、

とあり、「俱会一処」について述べている。即ち阿弥陀觀音の來迎により「一仏浄土」、つまり極樂浄土で再会し、共に過ぐすという内容である。「安元以後ノ娑婆之旧事」を語らうという一文から、この法要で供養されている人物は安元年間に亡くなった人物であることが再確認できる。

次に、本説草中で「君」「我君」とされた人物の特定であるが、これは後白河院と捉えてよいであろう。弁曉は説草の中で、後白河院を「我君」と称することがほとんどである。例えば「後白川院 嵯峨釈迦堂 八万部経供養」(『称』三三六函一四号)では、

我寺東大寺焼失之後、我君再奉修補大仏、造営仏殿御事、又我君八万部此一乗妙典誦誦御事、

と、後白河院を「我君」と称し、東大寺復興に尽力したことや法華経を八万部誦経したことを述べている。弁曉は、後白河院崩御後の説草でも同じ呼称を用いている。<sup>(34)</sup>このことから、本説草中で「我君」と表現された人物は後白河院を指すとみてよいであろう。

後白河院が、建春門院の御願であつた千日講や逆修を継続して行ったことは、猪瀬氏が『転法輪抄』に基づいて明らかにしている。<sup>(35)</sup>安元二年、後白河院は四天王寺で逆修を行ったが、この時澄憲が作成した表白「安元二年天王寺御逆修趣旨」が残されている。後白河院は、建春門院の御願であつた四天王寺参詣や千日講を相続し、千日講を仙洞御所、逆修を四天王寺で取り行うこととなった。すなわち、本説草前掲の「今御講演者、殊出御在生御意」と合致する。また、これ以降、後白河院の作善は数を増していくこととなり、「弁曉草」中で語られる、四天王寺での逆修も後白河院の姿を指すとみてよいだろう。

次に、本説草が用いられた時期を検討したい。四天王寺逆修以外にも、『転法輪抄』の「後白河上」には建春門院追善法会が修せられたことを示す説草が複数存在している。「建春門院千日御講結願表白」は、建春門院追善のための千日講に澄憲が出仕した際の表白である。弁曉がこの千日講に出仕していた記録は、確認できていない。文中に「今歳之天二年之曆夏末纏病秋初背世」・「聖靈承安某年千日講経始御」の文言により、建春門院が承安年間に始めた千日講を後白河院が引き継いでおこなひ、その法会の結願したのが建春門院の崩御した安元二年中であることがわかる。

しかしながら、本説草中には、「送四ヶ年而弥深」とあることから、「建春門院千日御講結願表白」記載の安元二年の千日講の結願時に使われたものではないことが明らかである。つまり後白河院は、安元二年の千日講結願後に新たに千日講を始め、建春門院崩御四年後の治承四年ごろに結願したと推測され、本説草はその際に作成された説草であると考えられる。

以上より、本説草は「弁曉草」の中で、使用された年月日が明示され



ているものや推測できる説草の中では最古のものといえる。弁曉は、京都焼き討ち後の東大寺復興に関する活動に着目されることが多いが、本説草は南都焼き討ち前における唱導僧としての弁曉の活動を表す史料といえよう。

最後に、史料名「千日講筵結願 為夫」の墨書について注目したい。

本説草の表紙には、中央に「千日講筵結願」と記されており、その下部に「□為先君皇后修之」とある(図1参照)。



図1「千日講筵結願 為夫」表紙  
称名寺所蔵(神奈川県立金沢文庫管理)

「為夫」は表紙の左端上部に、外題とは分けて記されている。西岡氏によれば、「弁曉草」の外題は原則的に表紙の中央に記されるが、左端に書かれる場合もあり一定ではなく、「廻向」「為君」など左端上部に書かれたものは見出しであり、簡便な分類として記されたものであろうとの見解が示されている<sup>(36)</sup>。また、外題のほかに記された標目は鉦阿の筆に

よるものであり、後に称名寺で勘案された可能性も示されている。筆者が確認したところ、例えば「弁曉草」の「四十九日廻向」(『称』三三四函三八号)は左端に外題が、右に標目が記されているが、標目に誤りがあり修正された痕跡がある(図2参照)。



図2「四十九日 廻向」表紙  
称名寺所蔵(神奈川県立金沢文庫管理)

この説草は三二歳という若さで亡くなった子どもの四十九日の法会であるのだが、誤って中央に「亡母事」と記したために、墨消されたものと思われる。このことから推測するに、「弁曉草」の標目は、書写された弁曉草の内容を読解しながら、鉦阿がのちに加えたものであり、作業途中で誤って記載したものも含まれると筆者は考える。「四十九日廻向」のように、墨消で後に修正された標目もあれば、修正されずに残された標目もある可能性が挙げられる。必ずしも標目が説草の内容に正しく沿っているとは限らないのである。

よって、検討している「千日講筵結願 為夫」においても、「為夫」は後に鈹阿により誤って記された標目であり、本来の外題は「千日講筵結願」であったと筆者は考える。この「弁曉草」の外題の問題については、「千日講筵結願 為夫」の他の説草も再考されなければならない。

「千日講筵結願 為夫」は欠損があり不明瞭であるが、外題の下部に記された「□為先君皇后修之（先君の皇后の為此を修す）」という一文から、また本文の内容と照らし合わせて「先君」＝後白河院の「皇后」＝建春門院平滋子のために修したと捉えてよいだろう。

## 第二節 「(六条上皇七回忌供養 寿永元年)」の検討

本節では、「(六条上皇七回忌供養 寿永元年)」(以下、本節では本説草と省略す、『称』三三六函一一四号四三)の検討を行う。

本説草は断簡の状態で全体が分かっていないため、このように仮題されている。しかしながら、本説草も本文から後白河院が建春門院の為に修した法会の説草である可能性が読み取れる。

(前欠) 聖霊仙洞ニ告別御之後ニ、秋風七報、講会展筵以降変曆五廻思日数之積年曆累、離別之悲難休付、莊道場召僧侶恋慕之涙再催中、去年正月先帝聖霊晏駕昇霞御、

これは本説草の冒頭部分である。「聖霊」が「仙洞」に別れを告げてから七年がたったこと、昨年の正月に先帝が亡くなった事が記されている。また、

安元二年秋別七ヶ年之限未半去年上陽春悲十余月之嘆相加、法皇□

時□□六句之御齡奉訪面□御菩提御一常經、日心□恋慕□事難抑、(中略)、依之迎七月八日更開□□十座之講席於五明三学高僧以祈三身四智之妙典、此雖為家前之例式、猶添當時之祈誠精勤至懇也、妙果豈空、謹見道場儀式所、是聖霊草創之伽藍也、

という部分から、この法会が七月八日から開かれたものであること、「聖霊草創之伽藍」で法会を行ったことが読み取れる。これに関して、『玉葉』治承二年(一一七八)七月八日条に以下のような記事がある。

七月八日、己巳、天晴、此日公家奉為前建春門院、於最勝光院被修法華八講初日也、悉所被講讀、去年所以下宸筆之御經也、限以五ヶ日、去年御八講四ヶ日、今被限五ヶ日、理不可馳、每年不退之勤也、

つまり七月八日から、最勝光院において建春門院の為に五日間法華八講が行われ、以後毎年執り行うよう決められたことが記されている。最勝光院とは建春門院が発願し造営された寺院であり、後白河院の法住寺殿の一角に造営された。<sup>(37)</sup>五日間の法華八講となれば、行われる講座は十講になる。<sup>(38)</sup>本説草が最勝光院における法華八講のものとすると、「迎七月八日更開□□十座之講席」「聖霊草創之伽藍」という文言とも一致する。また、後白河院と建春門院の皇子高倉院は、治承五年正月十四日に崩御している。<sup>(39)</sup>「去年正月先帝聖霊晏駕昇霞御」・「安元二年秋別七ヶ年之限未半去年上陽春悲十余月之嘆相加」という文言と照らし合わせると、安元二年から七年を経ずに正月(陽春)に亡くなった人物として高倉院が合致する。

加えて、高倉院崩御の悲しみから「十余月」を経た寿永元年という年

次も比定できる。つまり、本説草は寿永元年七月八日から最勝光院において執り行われた、建春門院追善の法華八講での説草の断簡であると考えられるのである。

本章では、六条天皇追善法会で用いられたと考えられていた説草を検証し、後白河院による建春門院追善法会で用いられたと特定した。今まで、弁曉が後白河院主催の建春門院追善の法華八講、高倉院宸筆御八講への出仕は確認できたが、千日講に出仕していた記録は残されておらず「弁曉草」の解説により初めて明らかとなった。

また、「弁曉草」中で明確に日時が特定できる最も古い説草は「聖武天皇山稜御八講初座」であったが、今回の検討により建春門院没後四年の治承四年（一一八〇）の千日講での説草「千日講延結願 為夫」が古い説草である可能性を指摘した。未だ推測の域を超えないが、建春門院の崩御が後白河院と弁曉とを結びつける契機となったのではなからうか。唱導僧として、後白河院の招請のもと唱導僧として活躍するようになった同時期である治承四年の年末に、平家による南都焼き討ちにより東大寺は未曾有の被害を被ったのである。続く第三章では、東大寺復興と後白河院をはじめとする世俗権力者たちとの関係を、「弁曉草」の中から検討していきたい。

### 第三章 弁曉草に見る南都復興

弁曉が南都焼討に際し、勸進聖重源上人と協力し復興を果たしたことや、東大寺別当就任後に東大寺僧の教学研鑽の場として「世親講」を創始し、仏法の興隆に努めたことなどは先行研究で知られている。<sup>(4)</sup>

本章では、弁曉が如何にして「唱導僧」として南都復興に寄与したの

か、「弁曉草」から読み取れる世俗権力とのつながりを通して再考していきたい。

#### 第一節 後白河院とのつながり

「弁曉草」の特徴の一つとして、後白河院に関わる唱導が含まれる点が挙げられる。後白河院（一一二七～一一九七）は、十二世紀後半、鳥羽院の第四皇子として生まれ、久寿二年（一一五八）に譲位したが、院政を三十四年にわたり行い、「治天の君」として君臨した。晩年は東大寺復興に尽力した人物でもある。また、後白河院が行った多くの作善や、熊野詣をはじめとした寺社への行幸は顕著であり、神仏への信仰を強く持った人物として知られている。<sup>(5)</sup>

『玉葉』文治三年（一一八七）五月二十七日条には、

弁曉此両三年前任律師、熊野御経供養賞、去々年任僧都、大仏開眼賞、齡未及宿老、連年昇進、頗為過分之上、今日転大僧都云々、

とあり、弁曉が熊野での後白河院の経供養や東大寺大仏開眼供養での功績により昇進したこと、またそれが過分であると記されている。「大仏開眼賞」とあるが、『東大寺續要録』供養編「文治元年大仏開眼記」には、弁曉が導師を務める予定であったが、定遍に譲ったとされている。弁曉の「大僧都」の転任はその勸賞としての昇進であったと考えられている。<sup>(6)</sup>伊藤聡氏は、『玉葉』における兼実の評価や、伊勢参宮での導師、大仏開眼供養での導師への内定などの事情から、後白河院の寵愛の深さ故、院の意向が働いたものとしている。

如何にして、弁曉は後白河院の寵僧となっていたのであろうか。前

章でも、後白河院主催で弁曉が出仕した建春門院追善法会の検討を行ってきたが、他にも後白河院が南都復興の中で弁曉と関わっていたことが「弁曉草」から読み取れる。

ここで検討したいのが、「大神宮大般若経供養 内宮御料 文治二年四月二十九日」(『称』三三六函二三号)や「聖武天皇山陵御八講初座」(『称』三一八函一四〇号)である。

弁曉はこれらの説草の中で、後白河院による南都復興と王権を結びつけて表現している。「大神宮大般若経供養 内宮御料 文治二年四月二十九日」では、

此時禪定法皇、忝為一乘六部之持者、此希代不思議之惡逆聞食、<sup>(46)</sup> 愼御愁徹肝、忍辱御衣浸涙、遂訪天平之古跡、被下知識、<sup>(47)</sup> 宣旨之刻、五畿七道、皆起隨喜之心、貴賤親疎、共抽奉加之志、且答其法皇十善之御願、且諸人一味之知識、<sup>(48)</sup> 修補複旧、面像如古、沙羅萎花匂、再綻和州之風、長夜隱月貌、重耀日域之天、即昨年八月八日、開眼早事了、<sup>(49)</sup> 当于其日、我后法皇執筆、親開大慈悲之眼、<sup>(50)</sup> 参会諸人列綱、泣契一佛在之縁、十方共感、万人皆悅、我願爰滿、

とあることから、文治二年(一一八六)四月に弁曉が導師として東大寺僧六十人を率い、伊勢神宮にて大仏殿再建の祈願をした際のものである。東大寺の焼失を受け、後白河院が治承五年(一一八二)に造寺官に藤原行隆を任命し、造営の官宣旨を発した件や、それに対し五畿七道の人々が協力し、大仏の修繕を成すことが出来た事を語っている。また、文治元年の大仏開眼会の当日の様子を感動的に表現している。<sup>(51)</sup>

また、「聖武天皇山陵御八講初座」は寿永二年(一一八三)五月十一

日から四日間、佐保山の聖武天皇陵において行われた御八講の初日である十一日に使用されたものである。この御八講は、大勸進上人である重源が願主として東大寺復興を祈願して開催されたもので、本文中にも東大寺復興を祈願する文言が見られる。その中で特徴的であるのが、「同正法像法之古、願仏法王法之潤」である。焼討以後の南都復興において後白河院を頂点とした「王法仏法相依」という考え方が存在していたことが明らかに<sup>(52)</sup>なっており、南都復興と王権を結びつけた認識が、政権側だけでなく南都側でも持たれていた証明となるだろう。

このような世俗権力との密接な関係を、弁曉は法会の表白で述べることに<sup>(53)</sup>により聴聞の人々に強く印象づけさせ、東大寺復興協力を求めたことが考えられる。

また、後白河院に関連する説草を概観すると「治承がたり」の特徴を見出すことができる。南都復興と「治承がたり」については近本謙介氏によつて研究がなされている。<sup>(54)</sup> 近本氏は、平家物語における鹿ヶ谷事件から南都焼き討ち、清盛の死という治承年間に起こった出来事を回録する「治承がたり」が、南都復興に携わる僧侶たちの著述からも見出せる<sup>(55)</sup>と指摘している。例えば、貞慶の『讃仏乗抄』(大仏供養本)の「此間、去治承之曆庚子歲、仏殿僧房忽化煙雲、禮像聖教空帰寂滅、是雖權臣之暴虐、猶起僧灌之濫惡」と、治承の乱の原因として僧侶の濫惡を挙げて<sup>(56)</sup>いる。また、「弁曉草」とされる断簡「(興福七堂伽藍依之昇煙)」(『称』三三六函一一四号二番)や建久元年(一一九〇)十月の大仏上棟式の際の説草であろう「(困窮ニテモ詮ハ)」(『称』三三六函一一四号三番)も同様に、治承の乱を語る表現が見出せ、近本氏は「公的な法会の場における南都の治承がたりのあり方を伝える」としている。当時の南都において、僧侶が治承を語ることは復興への足掛かりとしての意味を有して



いたのである。

そのような「治承がたり」が、南都復興とは直接かかわりのない法会でみられる事例がある。嵯峨の清涼寺で行われた御八講に弁曉、澄憲、その息子の聖覚が出仕しており、各々の説草が残されている。弁曉草「後白河院 嵯峨釈迦堂八万部御経供養」(『称』三三六函一四号)『転法輪鈔』「嵯峨清涼寺御八講表白」(『八講結願 第八座 為聖覚已講草之』)である。<sup>(48)</sup>このうち「弁曉草」のみ「我寺東大寺焼失後、我君再奉修補大仏造営仏殿」と治承の東大寺焼失について述べ、その後の後白河院による造営事業が述べられている。同様に、四天王寺供養における弁曉草である「表白 并釈段 院四天王御供養」(『称』三一八函一四五号)にも「而我大日本国去治承聖暦以後、此七八年以來惡逆相競、三宝廢国悩乱連綿」とみられる。嵯峨清涼寺釈迦堂での経供養のように、東大寺と関わりの無い後白河院主催の法会において、東大寺焼失と復興を語るのは特徴的であり、「治承がたり」の一つであると考えられる。弁曉は、表白の中で「治承がたり」を行い、後白河院と南都復興を世俗に印象付けることで復興の足掛かりとしたのではないだろうか。

## 第二節 後白河院周辺の人々とのつながり

本節では、「弁曉草」から読み取れる後白河院周辺の人物とのつながりを見ていきたい。

### (一) 八条院

後白河院の異母妹である八条院暲子内親王との関連を検討する。八条院(一一三七―一二二一)は、鳥羽院の皇女であり、后位を経ずに女院号を称し、鳥羽院と母美福門院の遺領からなる膨大な八条院領を持った

ことで知られている。

さて、八条院と弁曉の関連であるが、外題により八条院との関わりが明確である「弁曉草」が「大般若経」・「大般若経 八条女院御自筆金泥大般若」(『称』三三六函二五号)である。詳細は猪瀬千尋氏により論じられているため、ここでは猪瀬氏の研究に基づき概要の紹介にとどめた<sup>(49)</sup>。八条院は、安元二年(一一七六)から二十二年間大般若経を書写したが、弁曉は、建久八年(一一九七)に行われた石清水社での一筆大般若経供養に出仕し、その際に用いた説草を残している。その中では、八条院の徳や、崩御した後白河院の善行をたたえ、院を「日本国の父母二親」と表現している。また、治承寿永の内乱での亡卒や、崇徳院を「魔」として位置づけ、仏法の守護へと止揚させたとされている。

『玉葉』の文治元年(一一八五)八月二十七日の記述をみると、

(八月)廿七日丁丑天晴、依明日大仏開眼、法皇、八条院已下、洛中之緇素貴賤併下向南都、

とあり、大仏開眼会に後白河院とともに八条院が臨席していることが確認できる。よって、八条院は後白河院と同様に、南都復興に関わる行事において、弁曉と交わりを持ったことはまちがいない。

### (二) 近衛基通

次に、後白河院政下で摂政と関白に任じられた、近衛基通との関係を確認する。近衛基通と弁曉の関わりについては、追塩氏が既に論文で言及している<sup>(50)</sup>。それによれば、弁曉は正治二年(一二〇〇)五月八日から近衛基通邸で催された千日講に導師として出仕しており、弁曉が複数回

近衛家の千日講に出仕していた可能性を示唆している。

それを裏付けるように、「弁曉草」中には近衛基通に関わる説草が見出せる。その一つが「表白廻向 為父母遠忌」(『称』三一八函一四六号)である。

去仁安元年七月廿六日者、是先公聖靈御薨去之日也、殿下其時在幼稚之年齡、未知父子之恩愛、

近衛基通の父であり、近衛家の始祖である近衛基実は、仁安元年(一一六六)七月二十六日に二十四歳にて死去している。<sup>(31)</sup>基通が六歳の時である。以降、基通は父の正妻で平清盛の娘盛子が養母となり、平家と密接な関係の中で養育された。養母である盛子は、後白河院の皇子高倉院が天皇即位の際に准母となり准三后に任ぜられ、治承三年(一一七九)六月十七日に基実と同じ二十四歳にて死去している。<sup>(32)</sup>

引用部分と照らし合わせると、本説草は近衛基通が基実の為に修した法会での説草であることが分かる。なお、本説草の史料名には「為父母遠忌」とあるが、本文中に母の追善を指す表現が見当たらないため、前章で検討した「千日講延結願 為夫」と同様に、標目と本文の不一致の可能性が考えられる。

また、「廻向句 依仏法興隆除国土災事」(『称』三一八函一四〇号)では、「近衛殿」という文言が冒頭に記されている。

日本国宝二伽藍ノ多サ、それは東大寺大仏ヲ奉始メ、有法勝寺、法成寺モされとも、事ノ実ニ過算、大織官刻釈迦像、淡海公立興福寺御以降、貞信公造法性寺、大入道殿建立法興院、宇治殿建立平等院

乃至知足院、法性寺殿、内ニハ扶王法外弘仏法、

本文中には、日本国の伽藍の多さを東大寺の大仏を起点に、藤原鎌足による釈迦像造像や藤原不比等による興福寺建立、藤原忠平による法性寺、藤原兼家による法興院、藤原頼通による平等院と知足院の建立を賞賛している。そして近衛基通の祖父・藤原忠通が王法を助け、仏法を弘めたと結んでいる。ここで挙げられた人物は、近衛家の始祖である藤原北家の当主であり、此の説草が近衛家の法会のものであったことは間違いない。

また、近衛基通は「弁曉草」中で「殿下」もしくは「我殿下」と称されている。これを踏まえると、先の二例以外に一点近衛基通との関連が窺える説草を見出すことができる。「逆修 彼岸」(『称』三三六函一二五号)であるが、この中には「我殿下宝寿長遠、御子孫繁昌」という「殿下」なる人物の長寿と子孫繁栄を願う一文が見て取れる。

追塩氏によれば、近衛家の千日講には特徴があり、その一つが阿弥陀経と寿命経の供養により「現当二世」の功德が求められていたことである。先に検証した「表白廻向 為父母遠忌」の説草中にも、「現当二世」の文言が見られる。「我殿下」と記載のある「逆修 彼岸」の説草中にも「サレハ都現当二世ノ悉地成就御願円満足、是ハ今日弥堅マリ定ヌル事ト覚候」と述べられており、「我殿下」の呼称と合わせて、近衛基通に関連した法会の可能性が高い。

追塩氏は、近衛家の千日講出仕に関して「東大寺再建という課題を抱えていた弁曉にとっては有力者と結びつき、再建のための援助を期待する、という点では意味があった」と述べているが、本稿で検証した「弁曉草」からも唱導僧として近衛家と繋がる中で、南都復興に寄与した弁

曉の姿が浮かび上がる。

### (三) 平頼盛

最後に、平頼盛との関連が見える「弁曉草」の「為亡夫表白 遠忌千日 結願」(『称』三三六函四号)を検討したい。しかし予め、平頼盛と確定するに足る材料が少ないため、検討の余地は十分にあることを断っておきたい。その上で、弁曉と世俗との関連の見える説草の一つとして可能性を提示する。

「為亡夫表白 遠忌千日 結願」説草中には、「禪定女大施主」と施主が女性であることが記されている。また、供養対象については、冒頭に左記のような記述がある。

過去入道重相聖靈者、我多年偕老之友御、去文治二年六月上旬朝忽病廻運翳□□□、

ここから、文治二年(一一八六)六月に亡くなり、「重相」つまり「大納言」の位にあり出家した人物として浮かび上がるのが、平頼盛である。頼盛に連なる施主の女性として可能性が挙げられるのは、正室である八条院女房である。平頼盛は、治承寿永の乱の際には平家一門と行動を共にせず、妻が八条院女房であったことから、八条院を頼ったとされている<sup>③</sup>。本説草には、冒頭の一文以外には用いられた場や人物特定につながる情報はない。千日講結願の説草であることから、法会を修することができる高貴な人物であることは予想できる。

平頼盛は、文治元年に東大寺にて出家している。また、文治二年に行われた神宮寺での大般若経供養の際に経巻を調進した人物である<sup>④</sup>。この

大般若経供養は、東大寺衆徒伊勢神宮参詣に合わせて行われたものであり、後白河院を中心に南都復興や治承寿永の乱での亡卒追善の目的で行われた。「弁曉草」にも、伊勢参詣に関連する一連の法会に用いられたとされる説草が複数存在している。つまり、平頼盛は南都復興の法会を通じて弁曉と関連した人物の一人である。

これまでに、弁曉と平頼盛との直接の関わりを示す弁曉草は指摘されてこなかったが、「為亡夫表白 遠忌千日 結願」は、南都復興に関わる世俗とのつながりの見える一史料といえよう。

一見、「弁曉草」は整理がなされておらず、用途不明かつ統一性のない説草の集まりと見える。しかしながら、本章で検討した人物や東大寺復興を軸に見渡すと関連性が見出せるようである。ここで、「弁曉草」に関わる人物を系図とともに表す(図3参照)。

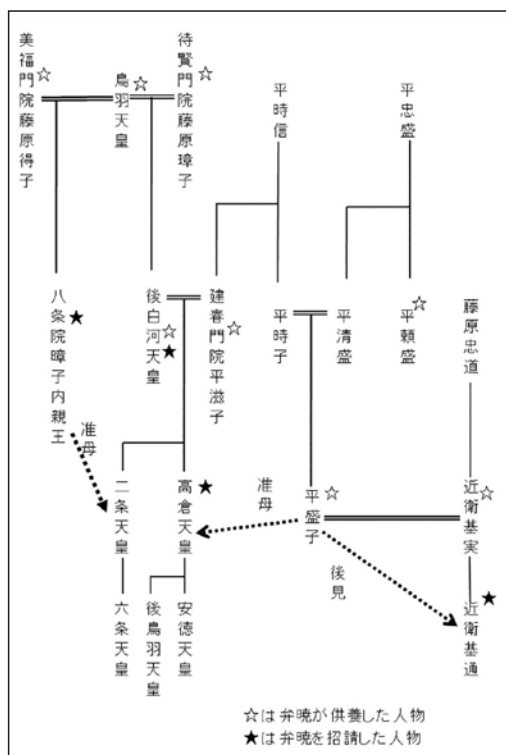


図3 弁曉草関係図

治天の君であった後白河院を中心に、女御である建春門院を介した平

家、近衛家、また後白河院の異母妹である八条院という相関図が出来上がるのである。唱導僧として弁曉が、世俗権力者と協力関係を構築しながら南都復興を目指したことが読み取れよう。

### おわりに

本稿では、弁曉草の解説を通して唱導僧としての弁曉の活動を探ってきた。一章では、維摩会や新熊野御八講での表白の比較を通して、維摩会のような僧階昇進の条件となる法会と世俗権力者が施主・願主となる法会では表白の表現や構成に違いがあることを確認した。

二章・三章では、「弁曉草」を歴史史料として用いながら、後白河院を始めとする世俗権力者とのつながりを解明した。その結果、六条天皇追善法会で用いられたとされた説草が、後白河院による建春門院追善の法会で用いられた可能性を提示した。裏付けが不十分のため推測の域を出ないものの、建春門院の崩御が後白河院と弁曉とを結びつける契機となったのではなからうか。「能説」とされた弁曉が後白河院主催の法会出仕が許され、名実ともに唱導の名手とされた頃、治承四年（一一八〇）に東大寺は焼き打ちという未曾有の危機に襲われる。この危機を、寺家側だけでなく公家も「王法」の危機と捉え、支援へ乗り出した。弁曉は、唱導を通じて世俗に南都復興への尽力を求め、世俗権力との関係構築に努めていった。

本稿の考察により明らかとなったのは、治承の乱、南都焼討といった公家・寺家双方の危機的状況の中で数々の法会が修されたこと、東大寺復興を契機とした人的関係の構築、そのような中で作成されたのが「弁曉草」であったということである。

しかしながら、これまでに検討された「弁曉草」は一部にすぎず、解説の余地は多く残されている。また、書写された「弁曉草」がどのようの後世で扱われたのかについても明らかにする必要がある。この点については、称名寺聖教「湛睿草」の中に「弁曉草」が含まれていることは知られているが、その他にも東大寺宗性が弁曉の説草を書写している事例も発見できているため、後世で弁曉の説草が如何にして受容されたのかは、別稿で論じたい。

今回、弁曉草の解説を通じて、建春門院や平頼盛追善法会への出仕等、弁曉自身の活動も浮き彫りとなった。他の史料と合わせて解説することで「弁曉草」のような唱導史料も、史料の一つとして活用できる一例として本稿を位置づけたい。

### 注

- (1) 『高僧伝』巻二三『大正新脩大藏経』第五十卷所収
- (2) 小峯和明氏「中世法会文芸論」笠間書院 二〇〇九年、山本真吾氏『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』汲古出版 二〇〇六年、矢口郁子氏「公請表白」・『玉葉』からみる安居院澄憲・安元以前」（『藝文研究』八〇号 二〇〇一年六月 慶應義塾大学藝文研究会）
- (3) 小峯和明氏「仏教教学のテキスト学―唱導・注釈・問書―」（『ハンドブック日本仏教研究』法蔵館、一九九六年）
- (4) 箕輪顯量氏「中国における講經と唱導」（『日本仏教の教理形成…法会における唱導と論議の研究』大蔵出版 二〇〇九年）二二頁
- (5) 箕輪顯量氏「法会という営み」（『日本仏教の教理形成…法会における唱導と論議の研究』大蔵出版 二〇〇九年）一〇頁
- (6) 神奈川県立金沢文庫編「称名寺聖教尊勝院弁曉説草 翻刻と解題」勉誠出版 二〇一三年
- (7) 『玉葉』承安四年十月十七日条



- (8) 追塩千尋氏「弁曉と東大寺復興」(『中世南都仏教の展開』二〇一一年 吉川弘文館) 二三頁
- (9) 西岡芳文氏「弁曉および弁曉草について」(『称名寺聖教 尊勝院弁曉説草 翻刻と外題』三五七頁)
- (10) 小峯和明氏「弁曉草の特色と意義」(『称名寺聖教 尊勝院弁曉説草 翻刻と外題』三六七頁)
- (11) 渡辺匡一氏「後白河院と四天王寺―金沢文庫唱導資料「弁曉草」から―」(『佛敎文学』第二五号 二〇〇一年仏敎文学学会) 六一頁
- (12) 伊藤聡氏「文治二年東大寺衆徒伊勢参宮と弁曉―金沢文庫保管『大神宮大般若供養』をめぐって―」(『佛敎文学』第二五号 二〇〇一年仏敎文学学会) 四八頁
- (13) 高橋悠介氏「弁曉の説草と東大寺大仏再建」(『特別展東大寺 鎌倉再建と華嚴興隆』二〇一三年 神奈川県立金沢文庫)
- (14) 神奈川県立金沢文庫編『称名寺聖教尊勝院弁曉説草 翻刻と解題』勉誠出版 二〇一三年
- (15) 山本真吾氏「第一部 文献学的研究 第一章表白・願文の定義」八六頁(『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』)
- (16) 高山有紀氏「総論」(『中世興福寺維摩会の研究』勉誠社 一九九七年)
- (17) 高山有紀氏「維摩会表白」の史的意義」(『史艸』三四号 一九九三年)、「講問論議と職衆」(『史料編』(『中世興福寺維摩会の研究』)
- (18) 高山有紀氏「維摩会表白」の史的意義」(『史艸』三四号 一九九三年) 七七頁
- (19) また阿倍泰郎氏「弁曉草 断簡」(『中世唱導史料集』二卷 国文学研究資料館 臨川書店 二〇〇八年) により、真福寺にも『維摩会表白抄 初度』と同内容の説草が残されていることが明らかになっている。
- (20) 佐藤道子氏「法華八講会―成立のことなど―」(『文学』五七号 一九八九年 岩波書店)
- (21) 龍口恭子氏「千日講の基礎的考察」(『日本の社会と仏教…千葉乗隆博士古稀記念論集』一九九〇年)
- (22) 菅野扶美氏「今熊野神社考―後白河院御所・法住寺殿論 その一」(『東横学園女子短期大学言語コミュニケーション学科編『東横国文学』二五号 一九九三年)
- (23) 注(22) 前掲論文
- (24) 『増補史料大成』所収
- (25) 「都玉記」に、十一月六日からの後白河院の新熊野神社参籠での様子が書かれており、「八日、癸丑、(中略) 次被始行恒例八講、堂莊嚴社家存例、正面以西敷高麗畳為諸僧座、權大僧都弁曉、」と弁曉が出仕したことが確認できる。
- (26) 上島亨氏「中世国家と仏教」四四三頁「表五「僧申文」で公請とされた法会」参照(『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会 二〇一〇年)
- (27) 高山氏注(16) 前掲論文、六八頁
- (28) 西岡氏注(9) 前掲論文
- (29) 注(6) 前掲書
- (30) 西岡氏注(9) 前掲論文、三六四頁
- (31) 「安居院唱導資料考」(『安居院唱導史料集上巻』永井義賢・清水有聖 角川書店 一九七二年) 四八二頁
- (32) 小峯氏注(10) 前掲論文、三七七頁
- (33) 猪瀬千尋氏「中世王権の音楽と儀礼」笠間書院 二〇一八年) 三七〇頁
- (34) 「後白河院法皇七回忌」(『称』三三六函一一四号九 弁曉は、後白河院を「旧院」「仙院」という呼称とともに「我君」と呼んでいることが確認できる。
- (35) 猪瀬千尋氏「後白河院における逆修と唱導」(『佛敎文学』四七号 仏敎文学会 二〇二二年四月)
- (36) 西岡氏注(9) 前掲論文、三六四頁
- (37) 脆谷寿「最勝光院」院政期における仏事行事の場―(『東アジアと日本 宗教・文学編』田村圓朝先生古稀記念会 一九八七年 吉川弘文館)
- (38) 龍口恭子氏「千日講の基礎的考察」(『日本の社会と仏教…千葉乗隆博士古稀記念論集』一九九〇年)
- (39) 「玉葉」治承五年正月十四日条
- (40) 追塩氏注(8) 前掲論文、三二頁

- (41) 『東大寺續要録』 佛法編
- (42) 安田元久氏『後白河上皇』 吉川弘文館 一九八六年
- (43) 伊藤氏注(12) 前掲論文、五五頁
- (44) 『東大寺統要録』 造佛編
- (45) 本説草中には「昨年八月八日、開眼早事了、」と記載があるが、『東大寺統要録』等の記録より大仏開眼会は文治元年八月二十八日とあるため、日付を誤ったものと考えられる。
- (46) 堀池春峰氏「鎌倉時代に於ける南都仏教の動向」(『南都仏教史の研究 遺芳編』法蔵館 二〇〇四年) 三五頁
- (47) 近本謙介氏「南都復興と治承がたり」(『軍記と語り物』第四三号 二〇〇七年三月) 八六頁
- (48) これらの比較を菅野扶美氏が「後白河院の信仰と澄憲・弁暁の表白」(『梁塵秘抄口伝集』巻十を軸に) (『紀要』共立女子大学 二〇一六年一月)で行っている。
- (49) 猪瀬千尋氏「八条院の一筆大般若経・五部大乘経」(近本謙介編『宗教遺産テクスト学の創成』二〇二二年 勉誠出版)
- (50) 追塩氏注(8) 前掲論文 三〇頁
- (51) 『公卿補任』
- (52) 『玉葉』治承三年六月十七日条、「尊卑文脈」
- (53) 安田元久氏「平家の群像」 塙書房 一九六七年
- (54) 「文治二年大般若経転読記」(『大日本史料』所収)

(付記) 小稿執筆にあたり、ご指導いただいた藤井雅子先生に心より感謝申し上げます。また、「弁暁草」の写真資料掲載にあたり、称名寺・神奈川県立金沢文庫よりご快諾いただいたことをここに記すとともに、ご高配に感謝申し上げます。

鈴木舞子(二〇一七年 文学研究科史学専攻 博士課程前期修了)